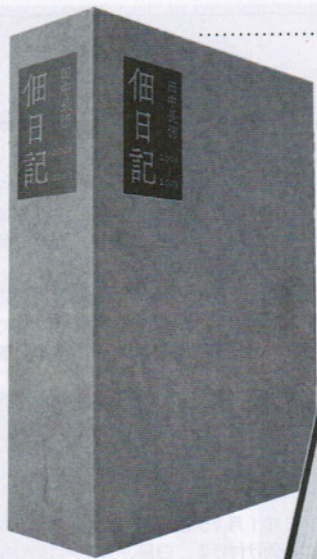


『佃日記』

田中長徳 著作
大隅書店：15,000円 [税別]
オリジナルプリント付

今月の
この本



著者50代の時代の脂ののりきった カメラ生活を綴った日記

評：富山由紀子

本誌でもおなじみの著者に
よる新刊は、2001年の春
に始まる、三年間分の日記を
まとめたもの。さまざまな世
相の変化を背景にして、東

京・佃の自宅を拠点に、欧州
やアジアの国々を行き来する
暮らしと、その中の思索が
飄々と綴られていく。

一冊に一枚オリジナル・プ
リントがついてくる嬉しさも
さることながら、著者が日々
購入するカメラやレンズにつ
いての話は、興味のある読者
にとっては垂涎の内容だろ
う。その道には明るくない私
のような読者でも、次々と登
場する機材の持つ歴史や、使
い勝手、売り買いをめぐるや
りとりを読んでいくと、いつ
のまにかそれらの存在に親し
みを感じてしまっている。

こうした親近感は、実際に
は会ったことのない日記中の
登場人物、特に、繰り返し登
場する人たちに對しても湧い
てくる。見知らぬ人を勝手に

知り合いのように感じてしまう
という、ちよつとした後ろめた
さも、他人の日記を覗き見るこ
との醜味の一つなのかもしれ
ない。

あるいは、時系列で書かれた
日記であるにも関わらず、その
物理的な時間の流れとは異な
る、奇妙な時のねじれのような
ものが潜んでいるのも、この日
記の面白さだろう。たとえば、
2000年の夏に亡くなったと
いう、母親をめぐるエピソード。
2002年の初夏にハノイ
を訪れた著者は、花々に彩られ
た葬列を街中で見かけ、二年前
の春と冬にも、同地で同じよう
な葬列を見たことを思い出す。

そして、春には生きていた母
が、冬の訪問時にはすでに逝去
し、この世に存在していなかつ
たことに思い至り、心打たれる
のである。「あの2000年の
春、ハノイのホテルギヤラクシ
ーの前の広場で見た葬列は、実
は母親のそれであったわけだ」
——と。

春にはまだ母は生きていた
のだし、ハノイで亡くなった
わけでもないのだから、この
記述は事実としてはおかし
い。しかし、世の中にはきつ
と、そういうこともあるの
だ。ふと目にした光景が、そ
の後の人生を先取りしている
——そのことに、二年の月日
を経て気づく、ということが。

そもそも日記とは、一種の
物語でもあるのだろう。なら
ば、こうした現実離れた時
のねじれがストーンと腑に落ち
てしまうのも、不思議なこと
ではない。

母の死をめぐる記述はま
た、写真の不思議について語
ったものであるようにも読め
る。あるシーンの中に、物理
的な整合性を超えて、過去や
未来が写り込んでしまうとい
う不思議である。この日記
は、日々の記録であり、物語
であるだけでなく、写真その
ものについての書でもあるの
だ。
(写真史研究家)